
ネギま 千の呪文を継ぐ者

なのは四期アニメ化希望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま 千の呪文を継ぐ者

【Zマーク】

Z5524Y

【作者名】

なのは四期アニメ化希望

【あらすじ】

気が付くと目の前に少女が居て「あなたは死にました」的な事を…ふざけてんのか?
え? 転生? 何そのテンプレ…逝くのは剣と魔法の世界…に近い感じの世界?

『ネギま』の世界に転生してネギの兄になる良くある話です。
「一番煎じ」じゃ済まされない! 「千番煎じ」ぐらいかな…?
『黒い月の魔王』を書いている途中に思いついたかなりの駄文です。

プロローグ（前書き）

無茶苦茶ですが許して下さい。なので細かい事は省にしないで下さい。マジで。
『黒い月の魔王』がメインなのでゆっくりです。

プロローグ

「あんた誰だ？」

俺は目の前にいる少女に質問する。

「私は神様なのです。えつへん！」

「…頭沸いてんのか？」

「違います！ホントに神様なんです！」

かなり必死だな…

「まあ、いいや。それよりここ何処だ？周りが本棚で囲まれた図書館っぽいが…」

「良くないです！本当なんですって！」

しつこいな、此奴…

「ここは何処だか聞いてんだけど？」

「うー、ここは世界の全てが記録されている場所、まあ分かりやすく言えば、型月の『根源』や、某仮面騎士の『星の本棚』みたいな所である。」

「…頭沸いてんのか？」

「また同じ事言されました！？しかも今回は一方通行っぽいし…」

「いや普通の反応だろ。」

「むむむ…分かりました！証拠を見せて下さい…

何が見たい？」

「そこはお前が決めるところだろ…？」

「確かにそうですね…じゃあ、これ。」

そう言って俺の恥ずかしい過去の映像を映し出す…つて、

「テメエ…何でこんなことを知つてんだ…？」

「神様だから。」

なんか色々疲れた…

「もういいや…」

「そうですか？じゃあ本題に入りますです。」

「いきなり声のトーンが落ちたな。」

「貴方は選ばれた。」

「いや意味わかんねえ。」

「理由は…秘密です。」」までで質問は?」

「有りまくりだ!!!」

「そうですか…無いですか。」

「有るつて言ったの聞こえなかつたのか?」

「貴方は転生することになりました!」

「無視か…!」

「つて、転生…?」

「はい。転生する世界はランダムで決まる!あつ、能力も三つまで聞いてあげられますですよ。」

「…いきなり一次創意的展開…」

まあ俺もそつ言うのに興味が有るけど

「取り合えずどんな世界かだけ教える。」

「まあ少しだけなら…剣と魔法の世界…に近いです。」

「じやあ、能力三つあげてください。」

「どうせ抗議しても無視するんだろ?分かつたよ…

一つ目は魔法の才能。二つ目は魔法具を作る才能。

…これ以上浮かばない無いな。」

「ええ!?チートじゃ無いですよ!?それに後一つは…?」

「じゃあ必ず転生後、男にしてくれ。」

「…分かりました。…詰まんないので勝手にいじるつと。」

「聞こえてんぞ…!」

「前世の記憶は自我が生まれると戻ります。」

また無視かよ…

「ちつ、まあいい。後一ついいか?」

「何ですか?」

「俺の家族を幸せにしてくれ。」

「もちろんです。ではいつてらっしゃい。」
神様？がそう言つと意識が遠のいて行つた。

「えつと、彼が逝く世界はこれだから、設定は……」

あのフザケた転生から4年、自我が芽ばえて2年がたつた。

俺の新しい名前は、アスカ。

父親はナギ・スプリングフィールドで、母親はアリカ・アナルキア・エンテオフィッシュ。

両親の名前で分かるように、かの有名な漫画『ネギま』の世界…しかも主人公の兄の立場…死んだな、コレ。

原作では分からなかつたが、2人共かなりの親バカらしい。俺の急成長を全く不思議に思つていらない所か、むしろ大歓迎している。調べてみて分かつたのだが、あの自称神様は才能をかなりいじつたらしい。その所為で魔法も適正がおかしい。

全属性普通以上、中でも雷と火はずば抜けている。

魔法学校に通わず、親父に風と雷、母さんに火と光の魔法を頼つている。

才能のお陰で、雷は『千の雷』まで出来る。最近は『王家の魔力』の使い方も習い始めた。

家は京都にある隠れ家か、魔法世界の隠れ家を使つてゐる。

時期はいまいちよく分からぬ。少なくとも大戦後でエヴァが呪われる前な事は確かだ。

取り合えず生き残るために力を付けよう。

闇の福音

「おらりー！『雷の暴風』……」

「無詠唱かよ！」

【解放！】『奈落の業火』……

現在、俺は親父とわりとマジで戦っている。

「お返しだ！」

【プラクテ・ビギ・ナル、契約に従い、我に従え、高殿の王！来れ、巨神を滅ぼす、燃ゆる立つ雷霆！百重千重と、重なりて、走れよ稻妻！】『千の雷』！…

「マジかよ！えっと…」

【百重千重と、重なりて、走れよ稻妻！】『千の雷』！…

俺の『千の雷』と、親父の『千の雷』がぶつかり爆発を起こす。

「ほらよっと。」

爆発に紛れ、いつの間にか親父が後ろから『雷の投擲』を突きつけてきていた。

「クッソ！またかよ…」

「はつはつは！俺に勝つなんて十年はえ！じゃあ、メシよろしく…」「わかつてるよ…」

俺は今、親父の旅に御供している。その途中、アル、ガトウ、アナ、詠春、ラカンとも顔合わせした。

旅での食糧などの確保は試合で負けた方がするのだが…あまり前だが、いつも俺だ。

まあ、毎日戦つてのお陰でかなり強くなつた。

どれぐらい強くなつたかというと、得意属性は全て広範囲殲滅呪文を使え、さらにもリジナルの呪文を創るレベルだ。はつきり言つてチートだ。

…親父に勝てないけど。

ちなみに魔法発動体は、先端がフックみたいになつてている短い杖は

『千の雷』取得祝いの親父たちの貢つた。

近くの川で魚を釣り、親父の所に戻るつとしているところ…近くの崖から金髪の女の子が落ちた…え？

「Why何故落ちる！？クソつたれが！…」

瞬動を使い一気に近づくと崖の端に片手をかけ、もう片方の手で女の子の手を摑む。

「危ねー所だつたぞ！クソガキ！…」

「クソガキだと…！」

女の子が何か言つてくるが無視して崖の上に戻る。

助けた女の子を見て…ってエヴァンジエリンじやねえか！？これ本来、親父が助けるところだろ！？

「貴様は魔法使いだな？何故助けた？」現実逃避していると何故か凄まれた。

「いや、普通助けるだろ…」

「私はあの程度では死なん！」

とりあえず無視して親父の元に戻る。

「おい！貴様聞いているのか！」

あー何も聞こえない。

「おいアスカ。こいつ誰だ？」

結局エヴァンジエリンはこっちに着いて来やがった。

「捨てられた子猫。」

焚いてある火の周りに釣つてきた魚を刺した棒を立てる。

「貴様…さつきから好き勝手言いおつて…私は『闇の福音』だぞ！」

！」

「えつ何？《夏の風鈴》？」

「もはや原型が分からぬじやないか！？舐めてるのか！？そろそろ真面目に話すか。

「…親父、任せた。」

「俺かよ！？」

自分だけ安全圏で笑つて居られると思つてんのか？

「はあ～しようがないな。で？何が聞きたい？」

「貴様等は誰だ？」

「俺はナギ・スプリングフィールド。んでこっちは息子のアスカ。

「何！？貴様があの《千の呪文の男》だと！？しかもこっちは息子

！？」

面白いぐらい驚いてるな。

「ああ、何ならアスカと戦つてみるか？」

「こっちは振りやがった！？テメーはバトルジャンキーだろー戦えよ！
「お前も今まで、ほとんど俺としか戦つてないだろ？良い経験にな
るぜ？」

「ちつ…わかったよ。」

「いくぞ！

【リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、来れ雷精、風の精！】

「いきなり！？」

【プラクテ・ビギ・ナル、来れ雷精、風の精！】

【闇を従え、吹雪け、常夜の氷雪！】

【雷を纏いて、吹きすさべ、南洋の嵐！】

「『闇の吹雪』！！」

「『雷の暴風』！！」

二つの魔法がお互いを相殺する。その隙に距離をとる。

「凄い才能だな…」

「お褒めに『り光榮だ。』

「しかし…明らか年齢と技術がおかしいだろ…」

「そう思いますよね…普通…」

「さて少し本氣を出そうか！」

【リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、闇の精靈501柱！集い來たりて敵を射て！】『魔法の射手　闇の501矢』！！

「ちょっ…多いって！」

【プラクテ・ビギ・ナル、九つの鍵を開きて、レー・ギャルンの筐より出て来たれ！】『燃え盛る炎の神剣』！！

アスカは次々と迫り来る射手を落としていく。

【リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、契約に従い、我に従え、氷の女王！】

「つ！？」

【プラクテ・ビギ・ナル、契約に従い、我に従え、高殿の王！】

【来れ、永久の闇、永遠氷河！】

【来れ、巨神を滅ぼす、燃ゆる立つ雷霆！】

【全てのものを、妙なる氷牢に、閉じよ！】

【百重千重と、重なりて、走れよ稻妻！】

【『凍る世界』！！】

【『千の雷』…】

結局負けたのは俺だつたんだが…めんどくさい事になつた。

「今、何つたんだ？エヴァンジエリン？」

「私のものになれアスカ。それと長いからエヴァで良い。」

「…プロポーズ？」

「違うわ！…従者になれと言つてはいるんだ！」

「…丁重にお断りします。」

そう言つてある魔法を発動させる。

「待てアスカ！！俺に押しつける気か！？」

俺の意図に気付いた親父の声を無視して、せつせつと炎を使った転移で逃げた。

「と言つわけで、しばらぐみんなの所を廻りつゝ廻りつ。」

「まあ…いいじゃろう。」

唐突だけど、俺はナギ達を漫画のキャラでは無く、しっかりと両親として見ている。

「何かあつたら直ぐ知らせるのだぞ。」

「りょーかい！んじゃあ、行つてくるわー！」

「氣をつけるのだぞー！」

「と言つわけでしづらへりへり廻るから。」

「いや、全く意味分からないんだが…まあ今はタカミチ君は居ないし、いいぞ。」

まずはガトウの所に来た。ちなみにアスナも居ます。

「アスカ…一緒に暮らすの？」

「おう！よろしく！アスナお婆ちゃん。」

「アリカ直伝…」

「はい？」

「…王家のビンタ。」

「ぶべらつー？」

アスナちゃんの攻撃を喰らい吹き飛ぶ。

「嬢ちゃん…今のつて…」

「嫌なこと言われたらやれ…ってアリカが…」

何教えてんの母さん！？

「そうか…」

ガトウ冷や汗搔いてんじゃねえか…

「ガトウ！頼みがある。」

直ぐに復活して話を変える。

「ん？なんだい？」

よそを見ていたガトウがこっちを向く。

「感卦法と無音拳を教えてくれ！」

「構わないが…お前、感卦法はかなり時間がかかるぞ。それでも良
いか？」

「ああ、頼む！」

『完全なる世界』と戦うためには力が必要るからな…

闇の福音（後書き）

話の展開が早いです。
アスカの杖は原作でとあるキャラが持っています。

呪文開発（前書き）

かなり無茶苦茶ですが、見逃して下さい。

o y z

「ガハハハハ！ そうか詠春にもガキが出来てたのか！！」
久しぶりに《紅き翼》 & 僕と母さんとアスナちゃんが集合して騒いでいる。

「ああ、」れでかいひぐらし同愛いんだ！」

「うむ！赤子はまるで天使じやならのー！」

なんか母さんと意気投合しちゃう！？

「ジャックはどうなんだ？相手でも見つかったか？」

んなもん見つかるれ

「タカミチは若いから良いよな…」

「 しつ師匠もまだ若いですよー。」

「アスカは誰が良いですか？」

アルが俺に聞いてくる。

俺を巻き込むな！－！－！

あのカオスな騒ぎから一夜明けた。

防波堤の上で、ガトウがタカミチに咸卦法を教えていた。

「……か？ 左手二竜牙！ 右手二氣

ガトウが咸卦法をやつてみせる。

「左手に魔力…右手に…うわっ！？」

「ダメだ、ダメだ。いいかタカミチ。自分を無にしろ、そんな調子

じゃ5年は掛かるぞ？」

「ハイ！」

「…」

それをアスナちゃんが真剣に見つめている。

「よお！姫様は今日も元氣か？」

そう言いながら親父達が現れる。

「あつナギさん、皆さん！おはよのひじぞこます！…」

タカミチが慌てて挨拶をする。

「バーカ、タカミチ。ナギさんはやめろひつてんだろ。ナギでいいつての！」

「そうだぞタカミチ、親父はバカだからな。」

「んだとアスカ！もう一遍言つて見ろ…」

「なんでもねーよ。」

「何をやつてたんだ？」

親父と一緒に来た詠春がタカミチに訊ねる。

「あ、いえつガトウさんに少し修行を…」

「左手に魔力…」

説明しているタカミチの後ろでアスナちゃんが感卦法をやろうとしていた。

「右手に氣…」

「おおつ！？」

一発で成功させた！？

そう言えばこんな場面あつたな…

「ハツハツハ！抜かれたなタカミチ君！」

唖然としているタカミチの肩に詠春が手を置く。

「これなら将来良い魔法使いの従者になれますね。」

「ハハハ！嬢ちゃん、オジサンのパートナーになるかい？」

ガトウの言葉にアスナちゃんが首を振る。

そしてこいつを向く。やな予感が…

「…アスカがいい」

やつぱりかあ…！」

「お…！」

「ブ…」

親父イ！何で嬉しそうなんだよ！

そしてアル！笑ってんじゃねえ！

「良かつたなアスカ…！」

「何が良いんだクソ親父…！」

「年齢的には今が一番可愛いですよ？それに見た目は同じ年ぐらい
ですし。」

「ロリコン有害指定図書は黙つてる…。」

「やつぱりオジサンは嫌かー」

「アスナちゃんはタバコが嫌いなんですよ…」

あれから数日間騒ぎ倒し解散する事になった。

「んで？アスカはどうするんだ？」

親父が聞いてくる。

「ああ、無音拳と感卦法は一様取得できたし…アリアドネーの魔法
学校にでも行こうと思つてゐる。この前セラスに誘われたしな。」

「アスカ…一緒に来ないの？」

「三、四年ぐらいたら会流すよ。」

「分かった…」

アスナちゃんが頷く。

「んじやあ解散だな！みんな元気にしろよ…。」

親父の声に返事をしてみんなと別れた。

炎の転移を使い校長室に侵入する。

「うーす！セラス居るか？」

「……いきなり転移して来ないでくれないかしら？毎回ビックリするのよ……」

セラスが疲れたように言ひ。

「わりーわりー。」

「はあ……で？どうしたの？」

「この間のお誘いを請けようと思つてね。」「ホント！？」

セラスが突然席を立つ。

「ああ、新呪文を幾つか完成させたいんだ。」「…また作ったの？まあ良いわ。

一様、立場としては特待生で良いかしら？」

「ああ、それで頼む。」

「すぐに部屋を用意させるわ。」「サンキュー。」

用意された部屋は普通の生徒用と同じものにして貰つた。
荷物の整理が終わると直ぐに図書館に向かつた。

「まずは『太陽の如き剣』と『雷霆の槍』を完成させて…アレ？必
須魔法一覧に『雷撃武器強化』が無い…『氷結武器強化』も無いな
…」
原作では綾瀬夕映が使つてたし…ちよつと気になる…
「よし！探すか。」

「無いな…」

調べた結果、何処にも書いてい無いことが分かった。

「…俺が作るか？」

面白そうだし…やるか！

「どうせなら全属性作ってやるわ。」

完成したら術式はセラスにでも渡すかな。

アリアドネーに来てから四年ほど経つた。新呪文の開発は順調に進んでいる。

今は新たに完成した呪文を試そつと近くの森に来ている。

「う～ん…ちょうど良い魔獣はなかなか見つからないな…」

一人でぼやいていたその時、

「きやあッ！？」

「ん？」

目の前に黒い短髪の少女が飛び出してきた。

さらに…

「G A O O O O O O O ! !」

火竜も出て来た…何で！？

「ひい！？」

女の子に向かつて爪が振り下ろされる。

「チツ！」

とつさに縮地クラスの瞬動を使い女の子を助け出す。

「大丈夫か？」

「へ？あつはい…」

女の子は啞然としながら返事をした。

普段なら入っては行けない森だけど私は興味本位で足を踏み入れてしまつた。

運が悪く竜種の中でも中の下クラスの火竜に見つかり追われていた。

「きやあ！？」

木の根に足を取られ倒れてしまった。

「ひい！？」

振り上げられた爪に目を瞑つてしまつ。

しかし衝撃は来なかつた。

恐る恐る目を開けると英雄ナギ・スプリングフィールドに似た少年の腕の中にいた。

「大丈夫か？」

「え？ あつはい…」

啞然としながら答える。

「少し此處で動かないでね？」

そう言うと私を地面におろし結界を施した。

「ちょうど良い相手だな…

【ヴィ・ヴェリ・ヴニヴェリスマ・ヴィヴウス・ヴィク、我が手よ
り昇れ、閃光の如き輝く稻妻！】

彼は今まで一度も私が聞いたことのない呪文を唱える。

「『天に墜ちる雷』！」

呪文が完成したと同時に、彼は地面に手を付いて言う。
次の瞬間、火竜の足下から上に向かつて雷の柱が昇る。

「GUOOOOO！！」

火竜は苦しそうに叫び声をあげ氣絶した。

side out

なかなかいい感じだな…

呪文も結構作つたことだし、そろそろガトウ達と合流するか…

「あの……」

「うん？」

「ありがとうございます。」

先程の少女が頭を下げる。

「あ～、気にしなくて良いよ。それより此処から帰れる?」

「えっと……その……」

やつぱりか

「じゃあ総長の所まで連れて行ってあげるよ。」

やつぱりて炎の転移を発動させ、少女を連れてセラスの元に戻った。

「もう行くの?」

「ああ、また来ると思うから。」

少女の保護者が連れていった後セラスに出て行くことを説明する。

「やつ……いつでもいらっしゃい。」「

「ああ、んじやあ世話になつたな。」

やつぱりて総長室をでた。

呪文開発（後書き）

・天に墜ちる雷

詠唱「我が手より昇れ、閃光の如き輝く稻妻！」

地面から敵の足元などから敵に向かつて登る雷。相手が避けにくいたわりにコントロールが難しい。威力は『白き雷』の数倍。

VS 完全なる世界（前書き）

かなり無茶苦茶ですが、見逃して下さい。

o y z

VS 完全なる世界

アリアードナーを出て再びガトウと合流した。

少し前に母さんからネギが生まれた、との手紙が来たのでそろそろ親父が行方不明に成る頃だろう……させる気はないが。

「どつち……」

アスナに急かされ現実に戻る。

「右だ！ って違った！」

「私の番……」

「さあ！ どつちだ？」

「じつち……」

「負けた――！」

え？ 何してるかって？ ババ抜きだよ！

「トランプ……しかも2人でよくそこまで騒げるな……」

呆れた顔でガトウが言つ。

「2人なのはお前が混ざらないからだろ！ ガトウ――！」

「私、飽きた……」

「アスナちゃんまで――？」

騒ぐ俺を無視してガトウがイスに座り手紙を出す。

「誰からだ？」

「ナギからだよ。」

「親父から？ 文字書けたのか……」

「……お前かなり酷いな……」

そつ言いながらガトウが手紙を開ける。

「…………これは……」

「どうした？ いきなり真面目な顔になつて。」

ガトウは返事をせず手紙を渡してくれる。

「…………マジかよ……」

「噂をすれば何とやらつてか？ ……噂はしてないが。」

「どうしたの……？」

アスナちゃんが不思議そうに聞いてくる。

「ああ、ちょっとマズいことが書いてあってな……」

ガトウに田配せをして外にする。

「行くのか？」

ガトウが訊ねてくる。

「ああ……その為に力を付けたんだならな。」

「奴らは……『完全なる世界』は強いぞ。」

ガトウが諭すように言つ。

「分かつて。……アスナちゃんを頼む。」

「それが俺の役目だ。しつかりやるわ。」

「……氣をつけてな。」

「ああ！」

そつまつと、炎の転移を発動させる。まずは母さんと合流だな。

「母さん！」

家に入るといつもの普段着ではなく、漫画で見た戦争中の服を着て
剣…『王剣』を側に置き、準備をしていく母さんが居た。
ネギは既に預けたのか居ない。

「帰ったのか…」

「ああ、親父からの手紙がガトウの所に届いた。」

「そうか…着いてくる気か？」

母さんが聞いてくる。

「ああ、止めても無駄だぞ。」

「分かつてある。ただの確認じや。」

準備が終わつたのか王剣をとる。

「行くぞ…まずはアルビレオの所じや…」

「了解！」

「見えてきたぞ！」

「母さんが叫ぶ。

「あれか…俺は転移で奴らの後ろに回り込む…」

「気をつけるのじゃぞ。」

「【…全ての者を、妙なる氷牢に、閉じよ！】」

確かに《水のアダドー》セプテンティム…だつたけ?の詠唱が聞こえる。

「ツ…？妾は先に行くぞ…！」

そう言うと親父の方に行く。いや…多分親父ならアレ喰らつても平氣だと思つけど…

つて母さんもうちょっとましな助け方無いのかよ…

「きつ貴様は！アリカ！？」

「俺もいるぜ…！」

《風のアーウェルンクス》セクンドウムの声に付け足しながら、後ろに転移し全力の蹴りを放つ。

「グウ！？」

魔力強化をした蹴りをモロに喰らいセクンドウムが吹き飛ぶ。

「アスカまで来たのかよ…！」

親父の声を無視して、小さいアーウェルンクス…フヨイトに攻撃を仕掛けれる。

「まさか《千の呪文を継ぐ者》まで来るとはね…」
サウザンドマスター・セコンダ

えつ？何それ？二つ名？要らないんだけど…

「誰だ？それ付けたの…まあいいや、取り敢えず喰らつとけ『魔法の射手 収束・雷の101矢』…！」

前回の戦いから一週間経った。

今はラカンと詠春を連れてきて作戦会議中だ。

「今度はこっちから仕掛けるぜー！」

親父が言い放つ。

「良いですが…敵の居場所は分かっているのですか？」

アルが親父に訊ねる

「それは…」

分かつてないのかよ！よく自信満々に、いつから…とか言えたなー！

「場所ならタカミチから聞いておる。《墓守の宮殿》じゃ。や。

おお～さすが母さん。

「あそこで戦うならアレ（・・）が居るはずですね…」

造物主か…

「そうなると、ナギにはアレの相手をして貰う事になるな。」

詠春が頷きながら言つ。

「後はセクンドウムが面倒ですね。あの肉体雷化は普通ならさわれません。」

あれ？確かに原作だとフュイトに殺されて居ないんだよな…

「そうなのか？アスカは普通に蹴つ飛ばしておつたが…」

アルの言葉に母さんが言つ。

「多分バクキヤラだからでしょつ。取り敢えずセクンドウムに攻撃を加えられ無いので、私とアリカ様は無理ですね。」

「親父もアレと戦うから無理だし、鍵持ちだからラカンも無理。」

「そうするとアスカか詠春の2人に限られますね。」

アルが俺と詠春を見ながら言つ。

「じゃあ、俺とアスカでアーウェルンクス2人をどうにかしよう。」

「んじやあ俺は火の嬢ちゃんだな。」

さつきまで話に加わっていなかつたラカンが言つ。

「では私はティナミスを。大戦の時に戦いましたからね。」

「そうすると妻は必然的に水じやな。」

墓守の宮殿に入ると、セクンドウムを含む5人が待つて居た。

「原作と同じならファイトに殺されているはず何だが… イレギラーか！
「予定道理、俺は造物主を探して潰す！此処は頼むぞ！」

親父は念話すると同時に駆け出す。

「テルティウム任せた！」

「分かつた！」

詠春に念話を送り戦闘に入る。

「一週間ぶりだな、アーウェルンクス！

『魔法の射手 雷の千一矢』！

「クツ！無詠唱の初步魔法でこの威力…！」

フェイトは障壁で防ぎながら避け、セクンドウムは肉体雷化を発動させ避ける。

それを見て、俺は前回の戦いからの一週間を使って作り出した身体強化魔法を使う。

「いくぜ！！

【ヴィ・ヴェリ・ヴィニヴェリスマ・ヴィヴウス・ヴィク！】

『戦いの旋律・雷』…

雷を鎧の様に体に纏う。

「何をしようと、キサマのようなガキでは私は捕まえられない…！」

「それはどうかな？」

雷の速度で後ろに回り込んできたセクンドウムに拳を叩き込む。

「何！？」

攻撃を受け、体が一瞬止まった隙に後ろに回り込み蹴りを放つ。

「グッ！私と同じ速度だと！？」

なんかホント咬ませ犬っぽい奴だな…

【ヴィ・ヴェリ・ヴィニヴェリスマ・ヴィヴウス・ヴィク、目醒め現れよ、燃え出づる火蜥蜴！火を以てして敵を覆わん！】『紫炎の

捕らえ手』！』

完全詠唱の捕縛魔法を発動させ、セクンドウムを捕らえる。

「『』の程度十秒有れば抜け出せる！』

「その十秒で叩き潰す！

【ヴィ・ヴォリ・ヴィーヴーリスマ・ヴィヴウス・ヴィク、九つの鍵を開きて、レー・ギャルンの筐より出て来たれ！】『燃え盛る炎の神劍』！』

手に超高密度に圧縮した炎の剣を作る。

「バカな…超高等呪文だと！？』

「さつきから同じ様な事しか言ってねーな、オイ！』

そう言いながら『燃え盛る炎の神剣』を振り下ろすが寸前の所で避けられる。

「おのれっ！』

【ヴィシュ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト、イグドラシルの恩恵を持つて、来れ貴くもの！】『轟き渡る雷の神槍』！』
俺の剣とセクンドウムの槍がぶつかり合つ。

【ヴィシュ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト…】

【ヴィ・ヴェリ・ヴィーヴエリスマ・ヴィヴウス・ヴィク…】

同時に始動キーを唱える。

【契約に従い、我に従え、高殿の王！】

互いに剣と槍を破棄して殴り合いながら詠唱をする。

【来れ、巨人を滅ぼす、燃え立つ雷霆！百重千重と重なりて、走れよ稻妻！】

詠唱が終わると同時に後ろに下がり雷系最大の呪文をぶち込む。

【千の雷】！』

千の雷が発動するとすぐに別の呪文の詠唱にいる。

【ヴィ・ヴェリ・ヴィーヴエリスマ・ヴィヴウス・ヴィク、契約に従い、我に従え、火の精靈！集い來たりて、敵を討て！】『紅蓮蜂』！』

未だ煙が晴れていないセクンドウムが居る方向に放つ。

「グガアアアア！？」

爆発音と共にセクンドウムの悲鳴が聞こえる。

煙が晴れるとそこには、下半身と右手を失い地面に倒れているセクンドウムがいた。

「バカな…造物主の使徒たるアーウェルンクスの私が人間のガキに負けるなど…」

俺を睨みながらそう言つて無視して近づく。

「じゃあな、人形。」

そう言つてセクンドウムの頭に『紅き焰』をぶち込んで燃やし尽くした。

セクンドウムを倒して直ぐに、俺は詠春の元に向かった。

「詠春！」

「アスカ！？セクンドウムは倒したのか！？」

「ああ！テルティウムは俺が引き継ぐ！詠春は親父の援護に向かってくれ！」

「大丈夫か？」

「ああ…だが流石にアレと戦うだけの魔力は残って無い。」

「…分かつた。死ぬなよ！！」

そう言つて詠春は親父の魔力の方へ向かつ。

「もう良いかな？」

「悪いな待つて貰つて。」

そうテルティウムに返事をする。

「まさかセクンドウムを倒すとは思つてなかつたよ。」

そう言いながらテルティウムは石の大剣を作る。

「正直死ぬかと思ったがな。」

俺は先程破棄した『燃え盛る炎の神剣』を再び作る。

一瞬で間合いを詰め剣を振り下ろす。

「君はどうしてそこまで頑張れる？この世界の秘密を知っているのだろう？」

「ふん！知っているさ！貴様等がやうつとする事の理由もな……
まざいな……魔力がかなり少なくなつて来ている……」

「ならば何故戦う？力ではどうしようもないのも、分かつているの
だろう？」

「はん！だからどうした！人間舐めんな……」

そう言いながら渾身の一撃を振り下ろし、石の大剣を碎きフェイト
を吹き飛ばす。しかしその反動で太陽の如き剣も炎に戻ってしまう。

「くつ！」

『千刃黒曜剣』！！

体勢を崩した俺に向かつて無数の黒い刃が襲いかかつてくる。

「ちつ！ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ直伝！

『千条閃鎧無音拳』！！

直ぐに体制を立て直してポケットに手を入れ、千の無音拳で黒い刃
を叩き落とし、さらりに障壁を破壊する。

「『千の雷』……」

止めに無詠唱で雷系最大の呪文を決める。

「はあ、はあ、はあ、やつたか？」

これで終わつたら、楽なんだが……

ゾク！！

突然寒気に襲われる。と次の瞬間、後ろから腹を何かに貫かれる。

「ゴフッ！」

口から血を吐く。

「「「アスカ！」」

倒れそうになる体に入れ後ろを向く。

「親父……いや、造物主か……」

クソ……結局こうなるのかよ……親父……

「待つて居れアスカ！直ぐそちらに行く！」

母さんの声が聞こえる。

「我が使徒を2体も倒すとは…素晴らしい才能だ、我が末裔よ…」

造物主が一瞬で田の前に現れ、首を掴む。

この距離なら…

「【…………】」

「声が小さいくて何を言つてゐるか分からんぞ?」

「テメエ…がいくら強く…ても…この距離なら…少しは効く…だろ

？」

造物主の手を思いつきつ掴む。

「キサマツ…?」

造物主が慌てて離れようとするが…

「零距離…『千の雷』…!…」

そこで俺の意識は途絶えた。

VS 完全なる世界（後書き）

『戦いの旋律・雷』

戦いの旋律を基にアスカが改良した肉体雷化魔法。
闇の魔法に比べ出力や多様性が劣る代わりにデメリットが無い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5524y/>

ネギま 千の呪文を継ぐ者

2011年11月25日23時08分発行